

山と博物館

第32巻 第11号 1987年11月25日

大町山岳博物館



成長したオオライチョウのメス



孵化直後のヒナ

オオライチョウの卵

たくましい足、何でももぎとってしまいうなクチバシは、日本に生息する鳥を見慣れているとワシやタカの仲間と勘違いしそうな姿である。付属園に来た見学者の中にはオオライチョウが目につくと「ワシがいた」と近づく人がいる。

ヨーロッパ産のオオライチョウが大町山岳博物館にやって来たのは昭和六一年三月のことである。一ツガイは大町山岳博物館と友好提携しているオーストリア・アルプス動物園から贈られた。残念なことにメスは輸送途中で死亡してしまった。

この知らせを聞いたアルプス動物園のペヒラーナ園長から、大町でのオオライチョウ繁殖を可能にさせるため卵を自ら日本まで持参して下さる旨の手紙をいただいた。

昭和六一年五月ペヒラーナ園長は五個の卵を携えて来日した。五個の卵は三個を孵卵器に、二個をチャボに抱かせた。このうち三個は無精卵、一個は孵化直前で死亡、孵化したのは一羽で、その雛も生来の虚弱で九日後に死亡するという結果であった。

先に来たオオライチョウを冬を迎えようとしていた昭和六一年一月、市長あてに園長からの手紙が届いた。その中にオオライチョウのことが触れてあり、「アルプス動物園と協同で大町山岳博物館のために最善の方法を考えたい。そこで、オオライチョウの研究者である西ドイツのアッシュエンブレンナー博士と一緒に再度オオライチョウの卵を持参し贈呈したいと思う」と記してあった。

昭和六二年五月、卵を持参して下さった園長と博士は昼食の時間まで割いて、孵化、飼育の方法についての技術情報を提供して下さいました。深く感謝している。

さいわい、オオ二羽、メス二羽の雛が誕生しスクスクと育ってきた。昨年は一羽で冬を越したオオも今年は仲間と一緒に冬を迎えることができる。この五羽がいつまでも健康で二世、三世の誕生の源となることを願っている。(宮野典夫)

オオライチヨウの雛を育てる

宮野典夫

昭和六二年五月にインスブルック市、アルプス動物園の御好意によりオオライチヨウの卵九個を入手することができた。このうち四羽が孵化し、オス二羽、メス二羽に育ち、初めての冬を迎えようとしている。

ここに孵化、飼育の経過を述べて、御協力、御支援いただいた皆様、成長を見守って下さった方々への感謝の意を表して報告としたい。

卵

卵は西ドイツのハンス・アッセンブレンナー博士の飼育施設で産卵されたもので、輸送は氏の手により五月三日に東京へ着いた。卵の大きさは長径が約五六mm、短径が四一mm、重さは四四〜五五gで、色は肌色に茶色の細かい斑点があり、小振りの鶏卵に色をつ

表 卵の計測値・孵化結果

卵NO.	長径(mm)	短径(mm)	重量(g)	孵化結果	種NOと性別
1	53.2	40.0	44.8	孵化(28g)	②オス
2	55.6	40.9	49.7	無精卵	
3	58.0	41.8	54.3	5日頃発生中止	
4	59.5	42.0	55.2	孵化直前で死亡	
5	58.1	41.8	53.5	無精卵	
6	56.3	41.0	49.7	孵化(32g)	①オス
7	51.1	40.9	47.2	孵化(30g)	④メス
8	53.9	41.7	48.8	無精卵	
9	55.3	41.5	50.7	孵化(32g)	③メス
平均	55.67	41.29	50.54		

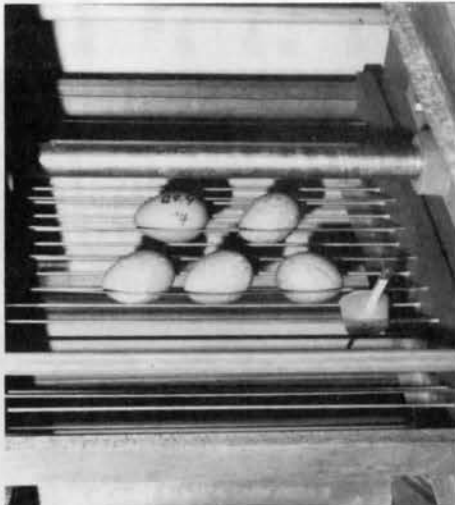


写真1 孵卵中の卵

けた感じである。

孵卵

孵卵の方法は前半をチャボによる抱卵、後半を人工孵卵器による孵卵の方法をとった。この方法はアッセンブレンナー博士の指示によるもので、現地では比較的高い孵化率をおさめている。

卵をチャボに抱かせたのは五月四日午後八時であった。五個を一羽のチャボに、四個を別の飼育舎のチャボに託卵したところ、順調に卵を温め続けた。

チャボから人工孵卵器への移動は五月二五日、抱卵開始から二〇日目である。この時、光線透視による検卵をして、胚の影があり発生が進んでいる五個は直ちに孵卵器に移した。



写真2 8日齢の雛(6月7日)

孵卵器は小型の立体孵卵器を使用し、孵卵器内の温度は最高温度三六・八℃、最低温度三六・四℃、湿度は六五〜七〇%に調整した。検卵の時、胚となるべき部分が透明で、発生が中止してしまったと判断した四個のうち三個は無精卵、一個は五日ころ発生が中止していたことがわかった。

打殻

打殻は孵化の前兆である。打殻とは卵の中の雛が嘴の先で卵殻や卵殻膜をつつくことで、卵殻の一方所に傷がつくとかすかではあるが規則正しい打殻音がするようになる。

この打殻音が確認されたのは五月二九日夕方から三〇日の夜にかけてで、五個のうち四個に傷がみられた。そして、五月三〇日午前九時から午後一時にかけて四羽が孵化した。四羽はいずれも活力のある雛で、孵化日数は二五日一三時間から二六日二時間であった。

打殻のなかった一個は孵化の兆候がまったくみられないので孵卵を中止し検査したところ、孵化直前に卵の中で死亡していた。

孵化直後から餌づけまで

一、施設

雛を育てるための育雛器は体を温めてあげる温源室と、運動したり餌を食べる放飼室の二部屋があり、両者は下部五cmのすき間を残してカーテンで仕切つてある。

一一日齢までの育雛器は五〇cm×一二〇cm高さ約二〇cmで、温源室は三四〜三八℃の温度帯が広く分布するようヒーターで調整し、放飼室は二〇〜二三℃に調整した。両者とも床面は綿の布を敷いた。

二、雛の行動

孵化直後の雛はぬれぬずみで、歩くこともできない。羽が乾き、足腰がしっかりするまでの半日〜一日間は孵卵器に置いた。



写真3 特別製育雛器と雛(6月22日)



写真4 日光浴する32日齢の雛(7月1日)

孵卵器から育雛器に移動したのは五月三日の午後で、この時の体重は約三〇gでふわふわした黄色の羽毛でおおわれ、頭と背に黒い斑点模様が見られ、体の割に足が大きく感じられた。

雛は温源室と放飼室の位置がわかるようになると、自分の好む温度の場所で休むようになり、目を覚ますと温源室や放飼室を歩きまわり、床や壁をつつく行動もみられた。しかし、ほとんどの時間を温源室で過ごしていた。

三、餌づけ

生まれたばかりの雛は体の中に卵黄が残っていて、しばらくはそれを吸収するため、孵化してすぐに餌を与える必要はない。

本格的な餌づけを開始したのは六月一日(二日齢)の朝からである。

餌は野草や木の葉、芽、花などと、人工的な配合飼料、カッターチーズ等を用意し、

六月一日(二日齢)にオオライチョウ

育雛器がいらなくなるまで

一、施設

栄養的にバランスのとれた配合飼料を中心とした餌設計とした。

育雛器放飼室に青菜類(ウグイス菜、ミツバ等)野草(イラクサ、ノコギリソウ、アサツキ、クローバ等)をびんざしや細切にしておくと雛は思い思いに餌をつつくようになった。配合飼料になるべく早く餌づかせるために、はしやピンセットの先に配合飼料をつけて動かしてやるとたくさんつついてくれた。

六月一日(二日齢)には小腸から排泄される小腸糞が、六月四日(五日齢)には盲腸からの盲腸糞がそれぞれみられ、消化系の機能が順調に働きはじめたことがわかった。食欲も増し、体重も増加しはじめ六月六日(七日齢)で平均四九gになった。

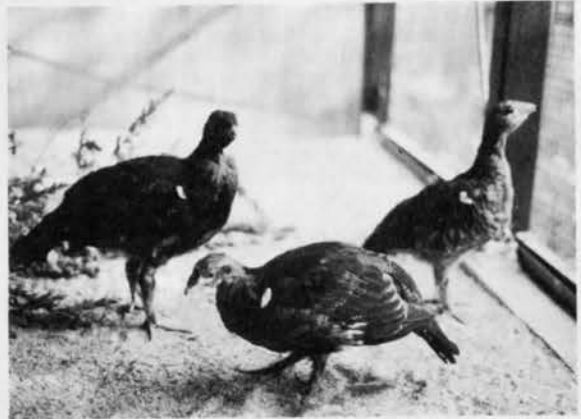


写真5 58日齢のオス(左・中央)とメス(7月27日)

へし合いの砂あびをするようになった。

二、行動

この時期の雛は動きも活発になり、飛翔力も日増しについてきた。

音には敏感で、ちよつとした物音にも反応するようになった。また、広い砂場があるにもかかわらず、一カ所にかたまつて押し合い

舎に設置した特別製の育雛器に移動した。この育雛器温源室は1m×1m高さ六〇cmで、赤外線ランプを付け三四〜四〇℃の温度帯が得られるようにした。放飼室は1m×2m高さ六〇cm〜1mのものである。温度調整はできず最高温度が一七〜二八℃、最低温度は一〇〜一六℃であった。

六月三日(二四日齢)から育雛器放飼室を徐々に広くしてやり、七月一日(三一日齢)からは約二〇㎡のオオライチョウ舎全面で飼育をした。



写真6 144日齢のメス(左)とオス(10月21日)

(山岳博物館学芸員)

冬を迎えて

九月になるとオスは尾羽を扇状に広げる行動をみせはじめ、オス同士の追いかつてくるようになる。トラブルがあつてはオス一羽を別の飼育舎に分離した。

二ホンライチョウとは違って冬になっても羽の色が変わらないオオライチョウは、オスは黒色、メスは茶色の姿で冬を迎える。

七月下旬になるとオスは胸元に光沢のある黒い羽が現われはじめ、メスは茶色と白の縞模様はつきりしてきた。小柄ながら一人前のオオライチョウに成長した。

三、餌

餌はタンポポ、ギシギシ、トウヒ、ヤナギウグイス菜、ミツバ、リンゴ、ニンジン、カッターチーズ、配合飼料、乾燥サナギ、アリの幼虫などで、朝四時三〇分から夕方六時までの間に六回の給餌をした。特にアリの幼虫は好物で、二人がかりで二時間かけて集めた幼虫も四羽で食べると十数分でたいてしまいう程であった。幼虫は七月上旬まで与えた。

のちにリョウブ、ナラ、野イチゴなどの山岳博物館周辺の植物やブルーベリーの実を与えた。

オスとメス

七月中旬になるとオスとメスの区別がつくようになった。オスは二羽で、目のまわりに黒い羽がみえはじめ、メスも二羽で、こちらは茶色の羽となってきた。いずれも1kgを超してきた。約三〇gで生まれた雛が五〇日で1kgにも達したことになる。

信濃にちなむ山の植物(2)

田畑真一

シナノサラサケマンについては、下水内郡飯山が生産地だという。

シナノスミレについては、木曾郡、木曾駒ヶ岳山麓が生産地だという。

シナノタイゲキ。これは上水内・小県・佐久・東筑摩・諏訪・上伊那の各郡に生育することを示している。

ちなみにシナノタンポポの異名としてウスギタンポポをあげている。

似通ったものにシナノトウヒレンがある。これは上水内・諏訪の各郡に生育することを伝え、異名がウスギタンポポだという。

また、シナノトンボがある。これは下伊那郡に生育することを伝え、生田が生産地だという。

シナノナルコもあげている。シナノネコノメの異名はマルバネコノメだという。

シナノノダケは諏訪郡に生育することを伝え、八ヶ岳が生産地だという。

さらにシナノハウチワ。これは下水内・佐久・木曾・上伊那の各郡に生育することを伝え、異名がオオメイゲツだという。

シナノヤマオトギリ。これは下水内・小県・北安曇・南安曇・上伊那・下伊那の各郡に生育することを伝えている。

そしてまた、シナノリトリノオ。これは諏訪・上伊那の各郡に生育することを伝え、入笠山・釜無山・仙丈ヶ岳が生産地だという。

ちなみにシナノレイジンソウ。これは上水内郡に生育することを伝え、戸隠が生産地だという。

四、おわりに

紙数のスペースも少なくなった。最後に牧野博士らの紹介を若干あげて、小稿をしめくくりたい。

それで牧野博士は、シナノガキをあげ、「西アジア原産といわれ、古く中国から渡来し栽培される落葉高木」(牧野博士、前掲書)という。

牧野博士は、シナノウメもあげ、「果樹として広く栽培されている落葉高木(田畑注、中略)別名(田畑注、コウメ)シナノウメはとくに信濃の国に多いからである」(牧野博士、前掲書)という。

北村博士は、シナノクロッパラをあげ、「本州(中部地方)以北」(北村博士、前掲書)という。

杉本唯三氏は、シナノギクの記名(杉本氏『植物和漢異名辞林』)もあげている。

〈別記〉小稿をまとめるにあたり、隠れた地元文献に資料性を得たことはいうまでもない。横内文人氏らの編集になる『長野県植物ハンドブック』などである。それに三井嘉雄氏のご配慮がなければ、小稿は完成しなかったといってもよい。三井氏に対し、心からの謝意を表するものである。

(日本山岳会会員)

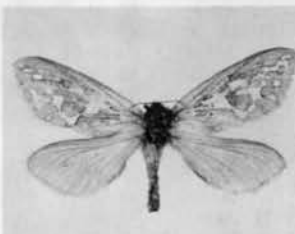
爺ヶ岳のオオギンスジコウモリ

(コウモリガ科)

宮田 渡

文 献

- 井上寛(一九六一)日本から未記録のコウモリガ蝶と蛾 十一巻四号 六二一―六三頁
- 中川秀幸(一九七二)オオギンスジコウモリの一産地、蛾類通信六四号 六〇頁
- 西尾規孝(一九八六)木曾山脈将基頭山付近に生息する蛾類の生態、誘蛾燈一〇五号 七五―九〇頁
- 井上寛(一九八二)日本産蛾類大図鑑解説編、コウモリガ科 四七―四八頁、講談社
- 宮田渡(一九八七)長野県産蛾類総目録 第七部 長野蛾報、一九号 一―九頁



オオギンスジコウモリ

(大町高校教諭)

山と博物館第32巻第11号

発行所 長野県大町市 TEL220-211
大町山岳博物館
印刷所 長野県大町市
大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四)三三一九三

オオギンスジコウモリ(学名 *Gazoryctra macilenta*) という珍しいコウモリガの一種が、北アルプスの爺ヶ岳(大町市)で採集されていた。標本は大町市立山岳博物館の標本室に所蔵されている。

本種は山岳地帯に生息する蛾で、成虫のはねの色は淡赤褐色をしており、前ばねの斑紋は美しい銀色である。日本における最初の発見地は立山弥陀ヶ原(一九六〇年)。(日本産蛾類大図鑑には立山室堂の名もあげられている)。二番目が北安曇郡小谷村白馬大池(一九六九年、標高二四〇〇m)、そして三番目が中央アルプス(木曾山派)西駒山荘付近(一九八三年)であった。本種は昼間活動性の蛾のようである。

爺ヶ岳産のオオギンスジコウモリは、採集年としては最も早い(一九五四年)が、記録公表年としては四番目の産地となる。

日本には八種のコウモリガが知られており、このうち長野県にはオオギンスジコウモリを含めて四種を産する。おわりに、雌雄の判別をいただいた井上寛博士ならびに文献コピーをいただいた神保一義氏に深謝する。

記 録

和名 オオギンスジコウモリ (雄一頭)
学名 *Gazoryctra macilenta* (Eversmann)
採集地 爺ヶ岳種池付近(標高二四〇〇m)
採集年月日 昭和二十九年(一九五四年)九月七日
標本所蔵 大町市立山岳博物館